

身代わり伯爵令嬢だけれど、
婚約者代理はご勘弁！ 1

登場人物紹介

デュワリエ公爵

国王陛下の右腕とも呼べる役職に就いている若き公爵。見目麗しい外見ではあるが、性格は奇烈。王宮内では「暴風雪閣下」とも呼ばれている。

アナベル

アメルン伯爵令嬢。社交界に飽きているため、入れ替わることでミラベルに任せている。貴族らしい高慢な態度が目立つ。

ミラベル

アメルン伯爵家の分家に生まれた貴族令嬢。従姉のアナベルと瓜二つの姿をしており、それを利用して入れ替わり、社交界を楽しんでいる。



ベルトルト

いつもおっとりしているミラベルの兄。家の跡を継ぐため、家業でもある王宮の馬番をしている。

シビル

アナベルの侍女。ミラベルとアナベルが入れ替わりをしていることを知っている一人。

フロランス

ミラベルが初めて出席した社交界でできた友達。可憐な見た目をしているが、体が弱く病気がち。

目次

本編

「身代わり伯爵令嬢だけれど、
婚約者代理はご勘弁！」

6

番外編

「身代わり伯爵令嬢だけれど、
ティーパーティーは戦場です」

195

番外編

「身代わり伯爵令嬢だけれど、
狩猟しゅりょう大会に誘われました」

259

プロローグ

私の名は、ミラベル・ド・モンテスパン。アメルン伯爵家令嬢だ。

アメルン伯爵令嬢ではない。アメルン伯爵家令嬢である。

つまり、私の家は、アメルン伯爵家の分家というわけだ。

父と伯父は双子の兄弟で、伯爵家は伯父が継いでいる。父は生まれたのがあとだったばかりに、爵位も、財産も、伯父のものとなってしまった。

私だってそうだ。伯爵家令嬢なばかりに、従姉である伯爵令嬢のアナベルとは、扱いが天と地ほど違う。

アナベルは社交界の華として、もてはやされる。長い歴史があるアメルン伯爵家は、進んで縁を結びたい名家だからだ。

伯爵令嬢であるアナベルは、どこに行っても中心的存在であった。

一方で、伯爵家令嬢である私は、いつもいつでも壁の花である。

名家であれど、分家と結婚しても旨みは少ないから。

私はいつもパーティー会場の壁際で、アナベルを見つめていた。

アナベルはいつだって流行の先端のドレスをまとい、私が大ファンである宝飾品ブランド、エー

ル」の新作首飾りを胸元で輝かせ、大勢の人達に囲まれている。

私はといえば、年に一度買ってもらえるドレスを、リボンを換え、フリルを付け足し、レースを加えてと、改造しまくりの状態で参加している。当然、グエール」の新作なんて、買ってもらえない。

同じアメレン伯爵家の生まれなのに、どうしてこうも違うのか。正直、羨ましいと思ってしまう。

そんな思いをアナベルに伝えたところ、彼女はとんでもないことを言った。

「社交なんて、面倒だわ。ミラベル。あなたが、わたくしの代わりにドレスを着て、お茶会やパーティーに行ってくれない？」

いやいや、アナベルの代わりなんて、務まるわけがない。なんて、一度は否定したが、アナベルは本気だった。

私達は従姉妹同士で、双子ではないのに、見た目に身長、体重、スタイル、髪質に至るまでそっくりなのだ。

昔から、服を入れ替えて大人達を騙す遊びをしていた。

今も、アナベルがしている化粧を施したら、同じ顔になる。

というのも、私の両親とアナベルの両親は共に二組の一卵性双生児。奇跡的な出会いにより、姉は兄と、妹は弟と結婚した。つまり、私とアナベルの遺伝子はほとんど同じ。異なる点は、性格と

取り巻く環境くらいか。

「アナベルの身代わりだなんて、無理に決まっている」

ほやく私に、アナベルは悪魔の微笑^{ほほえ}みを浮かべながら言った。

「ミラベルは、夜会を楽しみたいのでしょうか？ わたくしは、家でゆつくりしたいわ。大丈夫^{だいじょうぶ}、ばれないわよ」

それは、大変魅力的な言葉に聞こえた。

「おいしいお菓子と、香り高いお茶を、わたくしの代わりに楽しむだけ。そうでしょう、ミラベル？」

アナベルが言うおいしいお菓子と、香り高いお茶。それは、私が大好きなものである。しかし、人を騙すのはよくない。私達はもう、社交界デビューをした大人なのだ。

「わたくし、もう本当に疲れているの。これは、人助けなのよ？」

「ひ、人助け!？」

「適当ににこにこして、相づちを打って、お茶を飲むだけの、簡単なお仕事」

「ううっ……!」

「ミラベル、わたくしを、助けなさい」

「わ、わかった!」

というわけで、私はアナベルの身代わり業を始めることとなったのだ。

このときの私は、それがとんでもない事態を巻き起こすとは、一ミリも考えておらず。アナベルの恰好かっこうをしては社交場に顔を出し、人気のお菓子を食べまくる楽しい楽しい毎日を送っていたのだった。

第一話目だけれど、いきなりボス戦です

「——ちょっと、お待ちなさい！ わたくしを無視するなんて、いい度胸ね！」

吹き抜けの廊下に、凜と鋭い声が響き渡る。

驚くなかれ。これは、間違はなく私の声だ。

引き留めたのは、廊下を闊歩する——銀髪にアメシストの瞳を持つ、見目麗しい男性である。

年頃は二十歳過ぎくらいか。社交界で話題を独占するほどの美貌だという。そのへんは個人的に
いまいちピンときていないが。好みの問題なのだろう。

そんな彼は私の声を聞いてピタリと立ち止まり、振り返って睨みつけた。

視線だけで人を殺せそうな、鋭い眼差しだ。目と目が合った瞬間、全身に鳥肌が立つ。

さすが、暴風雪閣下ぼうふうせつかくかと呼ばれるだけある。

言葉を発さずとも、「なんだ、この、愚民その一が！」と聞こえてきそうな冷え切った目つきであつた。

くじけそうになる気持ちにぎゅっと蓋をして、百年先まで度胸を前借りし、声をかけた。

「もしかして、わたくしの美しさに、言葉を失っているのかしら？」



ここで、自慢の縦ロールを手で優雅に払うのを忘れない。

見事に巻かれた縦ロールは空中で一回転し、振り子のように元の位置へと戻ってきた。

視界の端で、縦ロールがポヨンポヨンと愉快に動いていて笑いそうになったが、ぐっと奥歯を噛みしめる。

今、絶対に笑ってはいけない状況なのだ。戦いの場なのである。

「暴風雪閣下」はこの冬一番の冷え込みを誘う、特大の雹を暴風に含ませているような気がした。それほどの、冷え切った目で私を見ている。

心の中で、自分に言い聞かせるように唱える。

——わたくしは、我が儘と高慢の権化アナベル・ド・モンテスパン。泣く子も黙る、アナベル・ド・モンテスパン。お山の大将、アナベル・ド・モンテスパン。身内も恐れる暴君、アナベル・ド・モンテスパン。

そう言い聞かせるが、なかなかアナベルになりきるのは難しい。育った環境が違うからだ。

アナベルの父親は歴史あるアメルン伯爵家の当主で、国王陛下の側近のひとりである。そのため、縁を結びたい人が大勢いる。

娘であるアナベルのご機嫌取りをして、なんとか近づこうとしている者が大勢いるのだ。

一方で、伯爵家の一員であるだけの父の仕事は、国王陛下のお馬番である。美しい白馬と、キヤツキヤウフと過ごすだけの、簡単なお仕事だ。母も馬好きなので、意気投合して結婚した。

一年中馬の遠乗りデートをするほど、仲がいい夫婦なのだ。

ちなみに、私の三つ年上の兄も、王太子殿下のお馬番を務めている。私以外、皆、馬が大好きなのだ。

……私の家族の話はいいとして。

アナベルは周囲のチャホヤに飽きていて、お茶会の参加すら面倒くさがっていた。一方私は、お茶会なんてめったに誘われぬ。羨ましいと呟いたときに、アナベルが「だったらあなたが、わたくしの振りをして行けばいいじゃない」と言ったのだ。

お言葉に甘えて、私はお茶会に参加した。アナベルの振りをしながら。

そこで、私は快感を覚えてしまう。人々がアナベルの機嫌を窺い、傳くという状態に。

私は見事、アナベルを演じきった。驚くべきことに、バレなかったのだ。

どうやら私には、アナベルの真似をする才能があったようだ。

そんなわけで、私とアナベルはちょこちょこ入れ替わっていた。

アナベルは面倒な社交をサボれるし、私はアナベルの振りをして我が儘放題ふるまえる。

当時は気付いていなかったが、どうやら私は他人にチャホヤされるのが、大好きだったようだ。だから、喜んでアナベルの代わりをしていた。

おいしいお菓子が食べられるし、面白い噂話が聞けるし。

とにかく、私にとって社交界は娯楽だったのだ。

私とアナベルの入れ替わりは、一度もバレたことはない。頻度は月に一度か二度で、短時間の催しに限っていたからだろうが。

ふたりが共通で暗記している社交帳も、とうとう十冊目を迎えていた。

そんな中で、アナベルは衝撃的な決定を告げる。なんと、婚約者が決まったと。相手はあの、暴風雪閣下こうしやくと名高い、デュワリエ公爵ヴァンサン・ド・ボードリアルだという。

彼は十五歳のときに爵位を継いだ若き公爵で、国王陛下の右腕とも呼べる役職に就いている。国王陛下相手でも、暴風雪のような睨みを利かし、仕事を進行させることから、そのように呼ばれるようになったのだとか。

見目麗しい外見であるが、性格は苛烈かれつそのもの。自分に厳しく、他人にも厳しい性格のようだ。デュワリエ公爵は二十二歳、アナベルは十八歳となり、共に結婚適齢期である。婚約期間を一年おき、結婚しようという話が急浮上したらしい。

伯父はとんでもない良縁を勝ち取ってきたなと思っていたが、婚約は先代同士が決めたものようだ。なんでも、若き先代デュワリエ公爵が、先代アメルン伯爵にチェスで負けた際、子ども同士を結婚させる、という約束を交わしていたのだとか。

その子どもが、アナベルとデュワリエ公爵だった。

アナベルはこの話を最近聞かされたようで、あり得ないと激昂げっこうしていた。というのも、数日前、アナベルは夜会でデュワリエ公爵に話しかけようとしたらしい。しかし、デュワリエ公爵はアナベ

ルを気にも留めずに、スタスタと歩いて行ってしまったのだとか。

彼女は叫んだ。こんな失礼な男との結婚なんて、まっぴらごめんだと！

それに、少しだけ恥じらいながら、好きな人がいると眩いていた。

あの、愛すべき暴君アナベル様が恋をしていたなんて……。

好きな人がいるのに、気に食わない男と結婚しなければならぬ。貴族女性って大変だなと、しみじみ思っていた。いや、私も貴族女性にカテゴリされるのだろうけれど。

兄の結婚相手すら決まっていけないので、結婚をどこか他人事のように思っているのだ。

そんなことよりも、私には気になっているものがあつた。アナベルの胸で輝く、ジュエリーブランド「エール」の最新のネックレスである。

喉から手が出るほど欲しい一品で、父にどれだけねだつても、買ってもらえなかつた品だ。夢の中にまで、ネックレスが出てくるほどだつた。

お馬番の父は、高給取りではない。それに、母に馬をプレゼントしたばかりだつたので、私のネックレスを買う余裕なんてなかつたのだ。

いつもいつでも、私が欲しいものを、アナベルはあっさり手に入れてしまう。私はいつものように、アナベルを「いいなー」と羨ましがっていた。

すると、アナベルが「あげましょうか？」と言ってくる。飛び上がるほど喜んだが、もちろん無償ではないとわかつていた。

何と引き換えにと尋ねると、アナベルは悪魔のようによく微笑みを浮かべながら言った。

デュワリエ公爵の代理の婚約者になって、と。しかも、ただ代理婚約者をするだけではない。デュワリエ公爵をメロメロにしてほしいと頼まれる。

どうしてメロメロにする必要があるのか。問いかけたら、アナベルは一枚の古びた書類を取り出した。それは、先代のデュワリエ公爵と先代のアメルン伯爵が結んだ、子どもの婚約を約束するものだった。

アナベルは世にも恐ろしい復讐劇を語る。

デュワリエ公爵をメロメロにした状態で、この契約書を破って婚約破棄する。愕然とするデュワリエ公爵の顔を見たい、と。

私が婚約期間中にアナベルの振りをしてデュワリエ公爵をメロメロにし、アナベルが契約書を目の前で破って婚約破棄をしたいようだ。

しかし、公爵家との結婚は、またとない良縁だ。破棄してしまっていないのか。問いかけると、アナベルは問題ないと答える。

どうやら、公爵家に嫁ぐとなれば、多額の持参金を用意しなければいけないらしい。アナベルの父親は、もつと格下の相手でもないのでは？ とアナベルの母親に意見していたようだ。

けれど、野心あるアナベルの母親が、結婚話を推し進めてしまったようだ。現在、アナベルの持参金集めに苦心している最中だという。

そのため、婚約が破棄になっても、大きな問題にはならないという。

どうしようか。頭を抱える。

デュワリエ公爵をメロメロにするなんて、無理だろう。即座に思ったが、アナベルは「これ、欲しいでしょう？」と、エール^グのネックレスを外してぶらつかせる。エンジンを前にした馬状態だった私は、あっさり^{アッパル}と悪魔の契約に乗ってしまったのだ。

そして——今に至る。

現在、取り巻きを大勢連れた状態で夜会に参加し、デュワリエ公爵と遭遇^{エタカウント}している。

作戦は、目の前の、暴風雪閣下^グをメロメロ状態にすること。

氷のような視線に膝^{ひざ}がガクブル震えてしまう。たじろぎ、後ずさりそうになったが、どうしても体が動かない。

逃げられない!! と、目の前に真っ赤な文字が表示されたような気がした。

ミラベル・ド・モンテスパン、人生最大の危機である。

どうしてこうなったのか。心の中で、頭を抱え込む。完璧^{かんぺき}な策略を立てていたのに、思うように進行しない。

私が事前に立てた作戦はこうだ。

きつと、デュワリエ公爵はさまざまな女性から好意を向けられ、一方的に慕^{した}われている。

そんな中で、高圧的な態度に出る女が現れてしまった。すると、「他の女と違う!」と強く印象

に残り、気になって仕方がなくなる。朝も夜も昼も、考えてしまうはずだ。

奇抜な行動の数々で彼を翻弄し、夢中にさせる。

それが、参考書であるロマンス小説を読んで考えた作戦であった。

こういう、何もかも手にしているタイプの男性は、享楽に飢えているのだ。

恋は娯楽である。楽しませた者が、勝者となるのだ。

一回目の邂逅の目的は、デュワリエ公爵を私に對して、「お前、おもしろい女」と思わせること。もちろん、アナベルという高級素材を最大限に活かす、印象づけるところがポイントだ。

アナベル様語録から面白い言葉を厳選して発言してみたが、睨まれるだけの結果となった。

わたくしの美しさに、言葉を失っているのかしら？なんて、現実世界に生きていてめつたに聞ける言葉ではないだろう。改めて、「アナベルつとんでもない生き物だ」と思ってしまった。私が彼女と遣伝子レベルでほぼ同じであるとは、とても信じられない。

それにしても、あまりにもデュワリエ公爵と対峙する時間が長すぎる。

内心、冷や汗たらたらだ。心の平静を取り戻すため、胸を飾っている、エールズのネックレスを触りまくる。これは、アナベルに借りた物だ。代理婚約者を演じているときは、彼女の所有するアクセサリーは使い放題なのである。

いつまで経っても、デュワリエ公爵は反応を示そうとしない。

このままでは、暴風雪で体調を悪くしてしまうだろう。年に一度の楽しい社交期なのに、風邪な

んか引いていられない。

アナベル様語録の中から、今の状況にぴったりの言葉を抜粋し、そのままデュワリエ公爵へ言い放つ。

「わたくしを見つめていたい気持ちはわかるけれど、そろそろ何かしゃべってちょうだいな。それとも、婚約者である、私の顔を忘れたの？」

「ここではなく、部屋へ、いらしてください」

意外にも、デュワリエ公爵は丁寧な言葉を返す。ただし、暴風雪をピユウピユウと吹き荒らしながら。

個室で話そうというのか。ただ、婚約者同士といえども、未婚の男女である。部屋にふたりきりにはなれない。私は背後を振り返る。

「シビル、付いてきなさい」

「は、はい」

シビルは私とアナベルの間にある契約を知る、唯一の人物だ。男爵家の娘で、普段はアナベルの侍女を務めている。

奇しくも彼女と意気投合し、親しくさせてもらっているのだ。

デュワリエ公爵はずんずんと前を歩いて行く。小走りしなければ、置いて行かれるだろう。こういうとき、アナベルだったらどうするのか。答えはひとつしかない。

「デュワリエ公爵！ お待ちになつて」

デュワリエ公爵は私の言葉に従つてピタリと止まった。振り返つた背後には、やはり、暴風雪が吹き荒れている。

あまりの恐ろしさに悲鳴を上げそうになつたが、今、私はアナベル・ド・モンテスパンを演じている。

アナベルだつたら、恐ろしく思わないはずだ。

またしても、アナベル様語録から言葉を探し、高圧的に話しかける。

「自分の歩幅と、女性の歩幅が同じではないと、ご存じではないようね。頭の中に唯一存在しているミジンコに、報告しておいてちょうだい。あなたが一歩進む間に、わたくしは五歩歩いていると」

私とデュワリエ公爵の間に、ヒュウと震え上がるような冷え込む風が通り過ぎる。

歴史に残るアナベルのミジンコ発言の引用はやりすぎだったか。ドレスの中は、汗だくだった。背後にいるシビルの、「ヒッ！」という声も聞こえた。

終わった——私の人生が。

まるで、断頭台に首を差し出しているような気分を味わう。

首から提げた「エール」のネックレスを、触りまくつた。しかし、心に平穏は訪れない。

きつと、デュワリエ公爵は部下に目配せするだけで、私を処刑できるのだらう。

首を切り落としたあと、埋めるときはどうか、エール、のネックレスも一緒にしてほしい。きっと、安らかに眠れるだろうから。

「失礼」

デュワリエ公爵は短くそう言って、ゆっくりゆっくりと歩き始めた。

私は、シビルを振り返る。彼女は手をヒラヒラと水平に動かしていた。大丈夫だった、と言いたいのか。

今度は距離を離されないよう、急ぎ足で進んでいく。

重たいドレスを引きずりながらなので、非常にしんどい。胴に巻いたコルセットだって、確実に私の大事な内臓達をぎゅうぎゅう締めつけている。けれど、湖の白鳥は、水の中のバタ足を絶対に見せない。

ドレスで優雅に歩くとは、そういうことなのだ。

ようやく、デュワリエ公爵の言う部屋とやらに到着した。夜会の参加者のために用意された、貴賓室である。

「こちらへ」

デュワリエ公爵に誘われ、シビルと共に中へと入った。

すぐに、デュワリエ公爵の手によって扉が閉められる。バタンと、大きな音が鳴った気がした。

それは、牢獄の扉が閉ざされた音のように感じる。

いや、牢獄の中に入った経験はないのだが。

デユワリエ公爵は私に長椅子ながいすを勧め、自らも座る。そのタイミングで、お茶が運ばれてきた。いつの間に、手配したのだろうか。

紅茶が注がれたカップから、湯気がふわふわと漂たなよう。

とつてもいい香り！ そんな感想は、喉からでてくる前にごくと呑み込んだ。

このレベルの紅茶は、アメルン伯爵家では日常的に飲まれているだろうから。香りなんて感じない、安い紅茶を飲んでいる我が家とは違うのだ。

飲んでみたらびつくり。品のある風味が、口の中で花開く。なんておいしい紅茶なのか。紅茶一杯で、幸せな気分が満たされてしまう。

一瞬、これは夢なのかと思つたが——目の前の暴風雪を見て、目が覚める。間違いなく、現実だ。実感した直後、冷水を浴びせられるような一言に襲われることとなった。

「このあと、陛下と面会の予定があるのですが、何用ですか？」

彼は、理由があつて急いでいたのだ。それを、知らずに尊大な様子で引き留めた。

本格的に終わつたと思う。もちろん、私の人生が、だ。

白目を剥むいていると、どこからか幻聴げんちようが聞こえる。

——気象情報です。本日は穏やかな晴天、ところにより、暴風雪でしょう。近隣住民は決して、暴風雪に近寄らず、家でおとなしく過ごしておきましょう——。

「アナベル嬢、いかがなさいましたか？」

アナベルの名前を呼ばれ、ハッと我に返る。幻聴を真面目に聞いている場合ではなかった。

先ほどの一言は、足下にサーッと雪が吹き荒れる地吹雪のごとく。ゾツとしてしまった。

どくん、どくと胸が高鳴る。

これは、美貌のデュワリエ公爵を前に起こる胸の高鳴りではない。命の危険を感じるものだ。

そもそも私の中では——尊大な様子で声をかけ、デュワリエ公爵を足止めする。そして、印象に残る台詞を言つて、冷たくあしらわれ、その場を去って行く。けれど、彼の中に衝撃として残る

——という予定だった。

それなのにどうして、こうして向かい合つて座っているのか。

だって、想像できないだろう。天下のデュワリエ公爵が婚約者の呼びかけに足を止め、私室へ誘い話を聞くなどと。

しかも、国王陛下との約束があるにもかかわらず、だ。

婚約者への対応が丁寧すぎる。他人へ時間を割くことを、嫌うような人だと思つていたのに。

別に、デュワリエ公爵と話したいことなど何もない。人を、氷漬けの刑にするような視線で見るような男性と。

先ほどから「エール」のネックレスに触れているのに、いっこうに心の安寧は訪れない。それほど、目の前の「暴風雪閣下」が強すぎるのだろうか。

もう、耐えられない。必殺「ちよつと、具合が悪くなりました。失礼を」を發動させてしまおうか。そんなことを考えていたら、話しかけられる。

「先ほどからしきりに、首飾りに触れていますが、何か、不具合でも？」

「不具合？」

問いかけられた瞬間、私は思わず立ち上がる。

この完璧な「エール」の首飾りに、不具合だと？

いったい、何を言っているのか。私はデュワリエ公爵に訴える。

「この「エール」の首飾りに、不具合なんて、あるはずがありませんわ！」

とんだ勘違いである。

すぐさま、デュワリエ公爵のもとへ駆け寄り、隣に腰掛けて首飾りを見せた。

「ごらんになってくださいまし。この、宝石の素晴らしいカットを。美しいでしょう？」

使用しているルビーは、そこまで色合いと透明度が高いものではない。しかし、独自のカット技法により、美しく見せることに成功している。素晴らしいに素晴らしいという言葉を重ねたくなるほどの、大変すてきな逸品いっぴんなのだ。

そんな「エール」の装身具は、社交界デビューをする年頃の女性のために作られた。

社交界デビューはどうしてもお金がかかる。装身具は母親のお古を、となってしまうパターンも多い。

しかし、しかしだ。装身具の多くは、成熟した女性を美しく見せるために作られたものである。十代の、初々しい女性がつけるには、大人っぽいのだ。

そこへ彗星のごとく現れたのが、ジュエリーブランド、グエール。社交界デビューの女性のためにデザインされた装身具を専門に、販売しているのだ。

美しく洗練された意匠なのに、お値段はそこまで高くない。社交界デビューを迎える娘を持つ親に、優しい価格設定となっている。

二年前に登場してから瞬く間に評判となり、今では入手困難になるほど大人気ブランドとなっているのだ。

私は一年前の社交界デビューの年に、グエールの装身具と出会った。

社交界デビューなんてしたくない。どうせ、アナベルばかりチャホヤされてしまうのだから。そんなふうにならぬ私に、父が装身具一式を買ってくれたのだ。

私はひと目で、グエールの装身具を気に入り、喜び勇んで社交界デビューを迎える。

誰かに見初められることはなかったが、グエールの装身具をつけた私は、気分だけはプリンセスのようだった。

おまけに、グエールの装身具をきっかけに、お友達までできた。今でも彼女とは、文通する仲間である。

社交界デビューの日、グエールのおかげで、初めてアナベルの身代わりでない私が、輝けた瞬間

間を体験できたのだ。

ブランド名の「エル」は「翼」という意味だ。まさしく、天高く羽ばたかせてくれるような、最高の装身具だった。

以降、私は「エル」に夢中になる。

「この、金で作られた精緻な細工が、素晴らしいでしょう？」「エル」のデザイナーは、十代の女性が似合う装身具を、理解している天才ですの。わたくしは、この「エル」の装身具に、大変勇気づけられました。本当に、素晴らしいジュエリーブランドですわ！」

ちなみに、「エル」を創立し、デザイナーも務める人物については、謎に包まれている。私と同じ年頃の少女だとか、少女の心を持った老婆だとか、いろんな憶測が流れているけれど、どれも噂レベルの信憑性が低いものだ。

何はともあれ、私はひとつでも多く、「エル」の装身具を手にした。

アナベルは約束した。デュワリエ公爵の婚約者を演じ、彼を夢中にさせたら、この「エル」の首飾りを私にくれると。

と、ここでハツとなる。すぐ目の前に、驚いた顔をしたデュワリエ公爵がいることに。

暴風雪は、いつの間にか止んでいた。それほど、私の行動は想定外で、戸惑っているのだろう。時が止まったように思える。

——ワタシハ、何ヲシタ？ ソモソモ、ココハ、ドコ？ ワタシハ、誰？

疑問が荒波のように押し寄せる。

荒波よ、どうかこのまま私を遠くへ攫さらってくれ。そんなことを願ったが、叶かなうわけもなく……。
これまでの行動を、改めて振り返る。

デュワリエ公爵が、エール〃の首飾りに不具合があるのでは？ と聞いたので、そんなことはないと、わざわざ目の前に座って指し示した拳あげ句く、エール〃について早口でまくしたててしまった。私は、とんでもないことをしてしまった。

デュワリエ公爵の隣に腰掛け、一方的にしゃべりまくるなど、ありえないだろう。

雪山で冬ごもりする熊の巣に入って、「ごきげんよう」と声をかけるような危険な行為だ。これが、子育て中の熊くまだったら、確実に死んでいただろう。冬ごもり中の熊は寝ほけ眼まなこなので、助かったようなものだ。

心の中で、頭を抱え込む。

王家とも強い繋つながりがあるデュワリエ公爵に、無礼を働いてしまった。

婚約がなくなるのはもちろんのこと、一族が社交界から爪弾つまはじきにされるのでは!?

そんなことを考えていたら、目の前のデュワリエ公爵の姿がぐにやりと歪ゆがむ。

涙で、視界が歪ゆがんでしまっているのだろう。

頬ほに熱い涙が流れていくのを感じていた。

もう、この場にはいられない。報酬ほうしゅうである、エール〃の首飾りはいらぬから、一刻も早く消

えてなくなりたい。

「ご、ごめんなさい。失礼を、いたしました!!」

謝罪の言葉を口にし、立ち上がった私は一目散に扉へ駆け寄る。視線で待機していたシビルに目配せし、ここからの退却を指示した。

扉の前でもう一度会釈し、部屋から飛び出す。

そこから、私は脇目も振らずに駆けた。

その日の記憶で覚えているのは、全力疾走に対してシビルが離れずに付いて来てくれたというこ
とだけ。

なぜ、このような事態になってしまったのか。

問いかけても、誰も答えてはくれなかった。

第二話目だけれど、アナベルが冷たいです！

報酬である、エールの首飾りに釣られ、私はデュワリエ公爵の身代わり婚約者役を引き受けた。それはアナベルの、デュワリエ公爵への復讐計画の一端いっぺんであった。

なんでも、アナベルはデュワリエ公爵に無視され、大変いざこざ憤おこっていたのだ。

もとより、この婚約は破棄される予定である。ならば、アナベルに好意を抱いたデュワリエ公爵を盛大に振ってやろう。

それが、アナベルの復讐であった。

私の仕事は、デュワリエ公爵をメロメロにさせること。

しかし、それはとんでもなく難しい任務だった。

社交界で、暴風雪閣下のと名高いデュワリエ公爵は、とにかくクールな性格で、他人に冷たい。

引き留め、睨にらまれただけで私は蛇へびに睨にらまれた蛙かえるの気分をこれでもかと味わった。

初日はアナベルという存在を印象づける予定だったが、思いがけない事態になる。

私の、エールの愛が暴走し、デュワリエ公爵に語り倒してしまった。

あの、驚いた表情を浮かべるデュワリエ公爵の顔が脳裏のうりにこびりついて離れない。

作戦は大失敗だった。

それからというもの、私は一週間も引きこもった。アナベルから呼び出しを命じる手紙が届いていたが、あの日の晩のことについてはあまりの恐ろしさに報告なんてできなかった。

家族は私を心配し、お菓子で釣って元気づけようとしていたが、それどころではない。

私は、デュワリエ公爵に大変な無礼を働いてしまったのだ。

これから、アメルン伯爵家への肅清しゆくせいが始まるに違いない。

私ひとりだけのついていた断頭台に、家族が仲良く並ぶ様子がありありと想像できてしまった。

みんなで断頭台なら、怖くない？

なんて、一瞬考えてしまったが、いやいやないと首を横に振る。

そもそも、アナベルに扮かぶしていた私は調子に乗りすぎていた。本人が高慢で我が儘だからと言って、好き勝手しすぎていたのだろう。

お茶会で高級なチョコレートばかり食べたり、グエールグの首飾りを自慢したり、大勢の取り巻きを引き連れて移動したり。

女王然としたアナベルの身代わりは、私にとつて娯楽だった。心から、楽しんでいたので。それが、仇あだとなったのだろう。神様から、罰が下されたのだ。

デュワリエ公爵に無礼を働いた罪で、アメルン伯爵家は窮地きゅうちに立つてしまう。

もしも、私ひとりの命で一家が助かるのなら、喜んで差し出そう。そこまで考えていた私のも

とに、ある訪問者が現れる。

シーツに包まり、扉に鍵をかけて籠城していた私は襲われてしまう。

無情にも鍵は解錠されバン！と勢いよく扉が開かれる。

「ちよつとミラベル！ どうして、このわたくしの呼び出しを無視するのよ！」

そう叫びながら接近し、包まっていたシーツを引き剥がしたのは、アメルン伯爵家の愛らしい暴君、アナベル様だ。

「夜会の報告に來なさいって、言っていたでしょう？」

「ぐ、具合が、悪くて」

「嘘よ！ 夜はぐつすり眠って、三食きっちり食べて、お茶とお菓子まで楽しんでると、ベルトから聞いたわ！」

ベルトルトというのは、私のお兄様である。馬が関わる場面以外では常にぼんやりしている、私でさえ大丈夫かと思うくらいのポンコツ兄だ。

それなのになぜか、アナベルは気に入っているようで、ふたりでお茶を飲んでいる様子をよく見かける。

たぶん、兄がアナベルを女王のように扱うので、気分がいいのだろう。

それにしても、兄が実の妹の情報をアナベルに売るとは。断じて許しがたし。

兄を恨むよりも、今はどうにかこの場を切り抜けなければ。暴君アナベル様を敵に回すと、大変

なことになる。アメルン伯爵家の法律は、アナベル自身なのだ。

私は咄嗟とつぎに考えた体調不良の理由を叫ぶ。

「こ、心の病気なの！ 胸が苦しくなつて、切なくなつて、夜しか眠れなくなつて、食事とお菓子と紅茶しか喉を通らなくなるの！」

「ワケがわからないことを言っていないで、起きなさい！」

「う……はい」

やはり、私のアナベルに勝てるわけがないのだ。のっそりと起き上がり、ボサボサな髪の毛と皺しわが寄つたドレス姿をお披露ひろめする。

「あなた、なんて酷いひど恰好けいごうをしているの？」

「心の病気なので」

「それはいいから、シャンとなさい！ それでも、歴史あるアメルン伯爵家の娘なの？ シビル!!」

アナベルは同行させていたシビルを呼び寄せ、私の身支度とどのを調えるように命じていた。

「身支度が調つたら、ミラベルの部屋で話をするわよ」

「……」

「いいわね!？」

否応いやおうなしに、決めつけられる。これぞ、暴君アナベル様といった感じだ。

扉がバタンと閉められたあと、シビルが可哀想な生き物を見る目で私を見つめていた。

「ミラベル、大丈夫？」

「大丈夫だと、思う？」

「そ、それは……」

シビルは明後日の方向を見る。

アナベルの侍女であり、私の親友でもあり、身代わり事情を知る彼女は、微妙な立場にいるのだろう。追及は止めて、身支度を調える手伝いをお願いした。

「ミラベル、髪型と化粧はどうする？」

「どちらも、いつもと同じ感じで」

皺ひとつないドレスを纏い、薄く化粧を施してもらおう。頬にかかった左右の髪を編み込んでクラウンのように巻き付けるといふ、ハーフアップに仕上げてもらった。

鏡の向こう側にいるのは、至って地味な私。アナベルそっくりに仕立てるには、華やかな化粧を施さないといけない。

私の普段の様子は、アナベルと似ても似つかぬものだった。化粧ってすごいと、改めて思ってしまった。

身支度を調べてくれるシビルの才能も、かなりのものなのだろう。

「ありがとう、シビル」

「こんなん、いいの?」

「いいの。これが、私だから」

可愛いのは、アナベル。

地味なのは、ミラベル。

人気があつて友達がたくさんいるのが、アナベル。

人気は特になく友達も少ないのが、ミラベル。

輝かしい未来を持つ伯爵令嬢、アナベル。

輝かしくない未来を持つ伯爵家令嬢、ミラベル。

ずっと、比べられてきた。

アナベルは日向ひなたの中を歩き、ミラベルは日陰ひかげの中を歩く。それが、彼女と私の役割でもあった。

「ねえ、シビル。私、どうなると思う?」

「どうって?」

「だって、あなたも見ていたでしょう?」

デュワリエ公爵の私室に招かれた晩、シビルも同じ部屋に控えていた。未婚の男女がふたりきりになるのは、よくないからだ。

彼女は私の一連の暴走を見ていた、ただひとり人間である。

「デュワリエ公爵は、私を氷漬けにして殺す! みたいな感じで見ていたでしょう?」



「いや、なんだろう。別れ際は怒っているようには見えなかったような、気がするけれど」
「だったら、どんな顔をしていたの？」

あの日の記憶は、私の脳内にほとんど残っていないかった。完全に、黒歴史扱いである。思い出さうとしたら、持病のしゃっくりが出てしまう。

シビルは当時の記憶を掘り起こし、何か思い出したのかボンと拳を手のひらに叩きつけた。

「戸惑いの表情を、していたような気がする」

それもそうだろう。いきなり大接近し、知らないブランドについてペラペラと捲し立てる者を前にしたら、困惑の感情しか浮かんでこない。

「怒っていないかったことは、アメルン伯爵家は、破滅の道を歩まなくても大丈夫なの？」

「どうして、いきなりアメルン伯爵家が破滅するの？」

「だって、暴風雪閣下の不興を買ったら、そうなくても不思議ではないでしょう？」

「いやいや、いくらデュワリエ公爵でも、そこまでの権力はないから。大丈夫よ」

「そ、そう？」

ホツとしたところで、シビルはとんでもない爆弾を投下してくれる。

「でも、アナベルお嬢様宛に、デュワリエ公爵から手紙が届いたようなの」

「へ!？」

どうやらアナベルの訪問は、手紙についてらしい。

デュワリエ公爵はいないのに、ビュウビュウと暴風雪が吹き荒れているような気がした。寒気を覚えて、自らの肩を抱きしめ、ぶるりと震える。

母さん、お元気ですか……ミラベルです。王都の冬は、寒いです。今も、暴風雪が吹き荒れております——。

「ちよつとミラベル！ わたくしの話を聞いていたの？」

アナベルの声で、ハッと我に返る。隣の部屋にいる母に、脳内手紙を書いている場合ではなかったのだ。

メイドが用意してくれた紅茶を飲む。残念ながら、デュワリエ公爵の部屋で出された香り高い紅茶とはほど遠い、薄くて味気ない風味の紅茶だった。これが、我が家の精一杯なのである。茶菓子も、バターをかき集めて作ったクッキーだろう。ホカホカなのは、アナベルがやってくると聞いてから慌てて焼いたからなのか。

一枚手に取って、齧ってみる。あつさりしすぎた味わいで、これは保存用のクッキーなのかと疑うレベルの硬さだった。

アナベルの家のクッキーはサクサクと軽い食感で、バターの風味が豊かに香っている。同じクッキーとは思えないおいしさだった。

一度おいしいものを口にしてしまうと、これまで食べていた味に戻れなくなってしまう。身代わりとは、なんて恐ろしい所業なのか。改めて思ってしまった。

「——と、いうわけなんだけれど」

「あ、ごめんなさい、アナベル。ほーっとしていて、聞いていなかった」

「なんですって!？」

ジロリと、アナベルは渾身の眼力で私を睨む。ちよつと前だったら、震え上がっていただろう。けれど私は知ってしまった。『暴風雪閣下』の、氷漬けにするような人殺しの睨みを。今となつては、アナベルの凝視など可愛いものには見えない。

「どうしてあなたは、そうやってほんやり生きているの？ 雪山だったら、凍死しているわよ？」

それは否定できない。先日、『暴風雪閣下』の領域に侵入して、死にかけた。アナベルのように、シャッキリ生きていないと、いつか命を落とすだろう。

「そもそも、なんなの？ あなたのその、代わり映えしない、地味な恰好は!？ ちよつとは社交界で、美意識を磨いてきたかと思っていたら」

「これが楽なの。それに、アナベルみたいに着飾る財力は、我が家にはないのよ」

化粧品もケチって、薄く施すように命令するくらいだ。思いつきり化粧するのなんて、アナベルの身代わりをするときくらいである。

「それに、常に張り切つて化粧をしていたら、私とアナベルの顔が似ていることが、周囲にバレてしまうでしょう?」

「それは、そうだけれど……」

アナベルは日向を歩き、私は日陰を歩けばいいのだ。

これまで通りやっていたら、たまに私と彼女が入れ替わっていることなど誰も気付かない。

「それでアナベル。話はなんだっけ？」

「ミラベル、あなた、本当にいい性格をしているわ」

「ええっ、そんな！ アナベルほどいい性格じゃないから」

「謙遜けんそんしないで」

「いやいや、本当に、アナベルのほうが、いい性格をしているから」

いい性格をしているアナベルはキッと眉まゆを吊り上げ、一通の手紙を差し出した。

それは、暴風雪閣下がアナベルに送った手紙である。

「え、これは？」

宛名は、アナベル・ド・モンテスパンだ。それをなぜ、私に差し出すのか。理解不能である。

「これは、デュワリエ公爵からあなたに届いた手紙よ。これを届けに、わたくしはわざわざここにやってきましたの」

思わず悲鳴を上げそうになった。

しかし、宛名を確認してほしい。名前はミラベル・ド・モンテスパンではなく、アナベル・ド・モンテスパンだ。

「いやいやいや、アナベル。これ、アナベル宛でしょう？」

「いいえ、あなた宛よ。婚約してから、手紙を送ってきたことなんて、一度もないの。シビルから聞いたわ。デュワリエ公爵と面会したのでしょう？ どう考えても、あなたが扮するアナベル・ド・モンテスパンに対するお手紙じゃない」

「え〜…そんなこと、ないと思うけれど」

アナベルは憤怒の表情で立ち上がり、ずんずんと私のほうへやってくる。そして、膝の上に手紙を置いてくれた。

そこには、最高にきれいな文字で署名してある。デュワリエ公爵ヴァンサン・ド・ボードリアール、と。暴風雪閣下は、美しい文字をお書きになるようだ。

「ってアナベル！ この手紙、未開封じゃない!？」

「そうよ。だって、わたくし宛ではなく、ミラベル宛ですもの」

「怖い、怖い！ アナベルが開けて読んでよ！」

「どうして、あなた宛の手紙を、このわたくしが読まなければいけないの？」

だって、暴風雪閣下からの手紙なんて、恐ろしい内容に決まっているから。思わず、アナベルに抱きつき絶すがつてしまう。手紙を押しつけようとしても、取り合ってくれない。

それどころか、さらに恐ろしい命令をしてくれた。

「ミラベル。デュワリエ公爵のお手紙をきっちり読んで、お返事を出しておくのよ」

「きゃー！」

「何がきやー、よ！ お手紙が届いたら、お返事を出すのが礼儀なの」

「ででででも！ これ、デュワリエ公爵からの、お手紙！ アナベル宛！ 私、ミラベル！」

「都合がいいときだけ、ミラベルにならないでちょうだい」

「いや、私、ミラベル。あなた、アナベル……ダカラ……！」

自分でも何を言っているのかわからなくなつて、言葉遣いがカタコトになつてしまふ。

こういう状態になつても、アナベル様は辛辣しんれつであつた。

「デュワリエ公爵と会つたときは、あなたがアナベルだつたでしょう？ わたくしに対する手紙ではないわ」

冷たくそう言つて、アナベルは私の体を振り払う。

「ミラベル。そのお手紙、三日前に届いたものだから。早く返さないと、大変な目に遭あうわよ。主にあなたが」

「ええつ、な、なんで、もっと早く……！」

「あなたが、わたくしの呼び出しに応じなかつたから、悪いのよ！ 遅くても、夕方までには返事を出してちょうだい」

「そ、そんな……！」

神様天使様アナベル様お助けを、と手を差し伸べても、ぷいっと顔を逸そらされてしまふ。

「シビル、行くわよ」

「あ、はい」

アナベルは速歩で去って行く。追いかけたが、「これから用事があるから、ついて来ないで！」とキツめに言われてしまった。

部屋には、私と『暴風雪閣下』からの手紙だけが残る。

ありえない悲劇……いいや、喜劇の始まりだった。



一時間くらい、手紙を裏、表とひっくり返し続けていた。

宛名のアナベルも、差出人のデュワリエ公爵も、どちらも恐ろしい。むしろ、ふたりはお似合いなのでは？　と思うくらいに。

ただ、こうもしてられないだろう。手紙は三日前に届いた。一刻も早く読み、返信しないと怒りの大暴風雪が巻き起こってしまうかもしれない。

「ヒイイイ……！」

悲鳴を上げながら、手紙を開封する。デュワリエ公爵家の紋章が押された封蝋ふうろうを裂さいたただけで、恐怖に襲われる。完全に、ホラーである。

ガクブルと震えつつ、便せんを広げた。

宛名や差出人と同じく、便せんには美しい文字が書き綴られていた。

その内容は――。

「は!？」

思わず、我が目を疑う。

デュワリエ公爵は夜会の晩、私を泣かせてしまった件に対して、深く詫びるという丁寧な謝罪文を送ってきたようだ。

なぜ? という疑問が、次々と浮かんでくる。

手紙はそれだけではなかった。後日、会って直接謝りたいと。

「いやいやいやいや! ないないないない、ありえない!」

デュワリエ公爵の手紙の前で叫んでしまう。それほど、衝撃的な申し出だったのだ。

あの「暴風雪閣下」が、この私に謝罪するだつて?

絶対に、阻止しなければならぬ。

すぐさま柵からペンとインク、便せんを用意し、アナベル風の文字で書き綴る。

お手紙が大変嬉しかったこと。わざわざ謝罪していただき、申し訳なく感じたこと。それから、お忙しいだろうから、直接の謝罪は必要ないこと。

三十回くらい手紙を読み直し、失礼な点がないか確認する。

父の部屋に移動し、アメルン伯爵家の紋章印を借りた。手紙に蠟燭を垂らし、印を押し当てて封

「じる。執事に頼み、速達で出すようお願いしてきた。」

これで夕方には、デュワリエ公爵のもとへ手紙が届くだろう。

安堵あんどの息を吐きながら廊下を歩いていたら、アナベルに鋭い声で呼び止められる。

「ちよつとミラベル！」

「アナベル!？」

なんと、帰ったかと思っていたアナベルが、まだ我が家にいたのだ。

ずいぶんと、お長い滞在で。

「え、ど、どうしたの?」

「別に、ベルトルトとちよつとお茶をしていただけよ」

「お兄様と? へ、へえ……」

ちよつとと言っていたが、あれから二時間半は経っているだろう。妹の私でさえ、兄と二時間も一緒にいられない。馬の話ばかりするので、退屈だからだ。

「お兄様と、なんの話をしていたの?」

「なんでもいいでしょう? それよりも、なんなの、この手紙は?」

アナベルが私の前にビシッと出したのは、先ほど執事に出すように頼んでおいた手紙だ。

「なんで、それをアナベルが持っているの?」

「念のために、内容に間違いがないか、確認したのよ」

「ひ、酷い！ 封をした手紙を勝手に開けるなんて」

「酷くないわよ。分家の紋章なんかで送ったら、偽物だと思われるでしょう？」

「へ？」

アメルン伯爵家の紋章は、白孔雀しろくじこくが羽を広げたものである。本家と分家では、微妙に異なる模様になっているらしい。

「本家は羽根が十枚、分家は八枚しかないの」

「そんな部分にも格差が……」

「あなた、今まで知らなかったのね」

「まあ、はい」

アナベルが指摘してくれなかったら、分家の紋章で手紙を出してしまうところだった。

「問題は手紙だけではないのよ。中身よ、中身！」

「中身、というと？」

「とほけないでちょうだい！ 何が、直接の謝罪は不要です、よ。あなた、わたくしとの約束は忘れたの？ デュワリエ公爵をメロメロにして、グールグールの首飾りを受け取るのでしょうか？」

「そ、そうだった！」

「一回でも多く会っておかないと、好きになってももらえないじゃない！」

デュワリエ公爵があまりにも恐ろしいばかりに、本来の目的を忘れていたのだ。

「でも、アナベル。デュワリエ公爵に好きになってもらうのなんて、絶対、死んでも無理。私の三時のおやつ、十年分賭けてもいい！」

「あら、どうして？」

「だって、デュワリエ公爵は、人間に興味はありません、みたいな冷徹な人なんだよ？」

「これから、あなたがあの手、この手を使って惚れさせるのでしょうか？」

「ど、どうやって!？」

「それは、ご自分で考えなさいな」

「そんな！」

この契約は、あまりにも危険が高すぎる。もしもバレたりしたら、アメルン伯爵家は破滅の道を歩む結果となるだろう。

「アナベル、家が没落してもいいの？」

「それも、いいかもしれないわね」

「はあ!？」

没落してもいいなんて、信じられない。正気かと、問いかけたくなる。

「どうして、没落してもいいだなんて……?」

「だって、飽き飽きしているの。今の、慌ただしいばかりで不自由な生活に」
だからこそ、アナベルは暇な私に身代わりを頼むのだろう。

日向を歩くのも、大変だと言いたいのだろうか。私としては、羨ましい限りだが。

「いいわ。ミラベル。もうひとつ、*グエール*のジュエリーを、付けてあげる。誕生日に、お父様がわたくしに買ってくれるって言っていたから」

「へ？」

「しかも、新作よ？」

「し、新作が、発表されたの？」

「あなたが引きこもっている間にね」

「う、嘘！」

「本当よ。ほら、これをこらんなさいな」

アナベルはデザイン画が描かれたリーフレットを差し出す。そこに描かれていたのは、*グエール*で販売されている*グエレガント・リレイ*シリーズの新作のデザイン画であった。

「やだ。すごく……きれい！ 新作って、*グエレガント・リレイ*なのね！ すごく久しぶりじゃない！」

現在、*グエール*で販売されているのは、社交界に出る女性向けに作られた*ピュア・ローズ*シリーズと、社交界デビューから一、二年経った女性向けに作られた*グエレガント・リレイ*シリーズがある。

*グエレガント・リレイ*は、ここ最近新作が出ていなかったのだ。満を持しての、新作発表だった

ことだろう。

「ミラベル。あなたが、デュワリエ公爵をメロメロにできたら、この新作をあげるわ」

「デュワリエ公爵を、メロメロ、に？」

「ええ、できるでしょう？ ミラベル、あなたならば」

アナベルの悪魔の誘惑に、私はあつさりコクンと頷く。

メロメロにする相手がデュワリエ公爵だなんて、^{うなず}「エール」の新作を前にしたら、すっかり忘れていたのだった。